

令和4年3月9日(水) 松本市議会2月定例会一般質問  
中島昌子議員質問要旨及び教育長答弁内容

Q:「子どもが主人公 学都松本のシンカ」という教育大綱が策定され、子どもの権利条例を持つまちにふさわしいと思う一方、社会教育なども大切であり、内容が子どもに特化しすぎているのではないかと感じるが、教育長の考えを伺いたい。

A: 今回の松本市教育大綱は、令和2年11月以来、市長と教育委員会が、4回にわたって協議を重ね、策定されたものです。「子どもが主人公」と謳っていること、また内容も、子どもを中心に据えた学びの視点などを掲げていることから、議員ご指摘のように、社会教育や大人の学びに触れられていないと感じる方もいらっしゃるかもしれません。

確かに、これまでの教育振興基本計画の基本構想(これを教育大綱に読み替えていました。)の中では、学都松本のめざす姿を、広く生涯学習の視点で捉え「学び続けるまち、共に学ぶまち、次代に引き継ぐまち」として、生涯学び続けることの大切さや、市民一人ひとりが学んだ知識を社会に生かしていくことの大切さを謳っていました。

私たち大人が学ぶ目的は様々あるわけですが、今回の大綱が目指す「子どもを主人公とし、その学びを地域社会全体で支える」ことこそ、一人ひとりが学んだ先にあるべき、よりよい社会の究極の姿であり、学都松本の真価(真の価値)は、実際に、そうした営みを連綿と継承してきた松本の市民性にあるのではないかと考えております。

松本が学都と呼ばれる所以は諸説ありますが、最も代表的なものは、旧開智学校の建設費用の7割が当時の市民の寄付で賄われたというエピソードです。これは、当時の市民が子どもの教育を真ん中に置いていたことの紛れもない証であり、その時蒔かれた種が、100年余の時を経ていま、市民が学び続けるまち学都松本として花開いているのではないのでしょうか。

しかし、今を生きる子どもたちの現状に目を移したとき、近年、顕在化した子どもの貧困問題に象徴されるように、先進国と言われる我が国においても、子どもの成育環境と教育格差の問題は深刻な状況と言わざるを得ません。まずは、子どもたちのいのちと健康を守ることを、そして生まれ育った環境に左右されることなく、一人ひとりの可能性を伸ばせる、多様な学びの機会を保障していくことが必要です。

そしてそのような社会情勢だからこそ、いま改めて「子どもを主人公に、その学びを地域社会全体で支える」ということを、学都松本のシンカ(進化・深化、進め深めて)として、市民が意識的に取り組むことが、すべての人が生きやすい、持続可能な地域社会の発展につながり、100年後の市民に評価されるものと考えております。